郷土摂津 いにしえ通信

第５６号　平成１４年１２月１日

発行　摂津市教育委員会　生涯学習部生涯学習課

〒５６６－８５５５　摂津市三島一丁目１－１

℡（０６）６３８３－１１１１　℡（０７２）６３８－０００７

ホームページアドレス　http://www.city.settsu.osaka.jp/

第９回 くらはんか舟

シリーズ！ 淀川を往来した船

枚方茶舟の派生と紛争　先月号で淀川における茶舟の始まりは柱本からとお知らせしました。また枚方舟番所の公用も柱本茶舟二十艘が交替で勤めていました。しかし、その後茶舟の中心は枚方の方に移っていきます。それは、淀川交通の発展と共に仕事も増加し、枚方と柱本とは１里と離れていることが問題になってきたからです。急用の場合などにも差し障りがでてきました。そこで相談の結果、柱本茶舟の中の亀屋源三郎という者を一人枚方の方に派遣することになりました。亀屋源三郎の売り物は、普通の茶舟の煮売りとは種類を変えて、舟に火床を入れず餅・しんこだけと決められました。また働く時間も昼ばかりで夜は暮れ六つ時限りで引くことと決めていました。

このように役人に届出の上、寛永 12 年（1635）９月５日に枚方に引越しをして、仕事をするようになりました。これが枚方茶舟の始まりです。しかし、枚方茶舟としての独立ではなく、あくまで柱本茶舟の中の一株だけが、枚方に居住して商いを行うという形でした。

正保３年（1646）３月 11 日から、亀屋源三郎は、以前の取り決めを破り豆腐の煮売りを始めます。調整の結果、煮売りをするから柱本に帰るということで話がまとまります。そこで１年あまり柱本に帰り、煮売りを行いました。しかしその後、やはり枚方で従来どおり煮売りはせずに餅・しんこだけを売るということを約束して決着を見ました。このように柱本でも明治初期まで茶舟は残るのですが、この１株の枚方茶舟が大きく発展し有名になっていきます。

保津川くだりと茶舟

京都府亀山から嵐山までの 16 キロを約２時間かけて下ります。今でも嵐山で茶舟のような商いが見られます。

講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

投稿コーナー

「石部宿場の里の文化財を訪ねて」に参加して

三島　T．I

文化財愛護会主催のバスツアーに参加しました。石部町？滋賀県のどこ？地図を見て初めて宿場町という事に納得しました。石部町は東海道五十一次。京都三条大橋をでて草津（京から六里）で泊まるのは近すぎて、水口（京から十二里）まで行くには遠すぎる。その間にある石部町はちょうど一泊するのに最適で、宿場町として栄えた事が伺えます。

当日 11 月 19 日は、朝の集合の時は、寒かったのですが、陽がのぼるにつれ暖かくなり、絶好の歴史散策日和となりました。お天気だけは運まかせ、みんなの願いが通じたようです。また紅葉も終わりに近い時期で、なんとか間に合い、見事な紅葉を愛でることができました。

バスは高速道路に入り、会長の橋本先生から、石部町や今回、訪れる寺々についてご説明があり、充分な予備知識を得て石部町へ着きました。

はじめに石部町歴史民俗資料館に行きました。関所・農家・商家・茶店など６棟の建物が復元されていました。写真でも模型でも味わえない壮観な眺めに、しばし江戸時代にタイムスリップ。周辺には臥龍の森、運動公園などがあり、心地よい時間が過ぎていきました。石部町教育委員会の山元課長に案内をいただき、普段なら見過ごしてしまいそうな所まで説明いただき、より分りやすかったです。

次に常楽寺へ行きました。山岳仏教で有名な阿星山の北のふもとに位置するこのお寺は「西の寺」と呼ばれ、地元の人達に親しまれているようです。お寺の方から本堂、三重塔は国宝。釈迦如来座像、二十八部衆などは重要文化財に指定されていることから、お寺の起源まで詳しい説明をいただきました。

西の常楽寺に対し「東の寺」と呼ばれ親しまれているのが長寿寺です。こちらも天平年間、聖武天皇勅願と由緒のあるお寺で、本堂が国宝、弁天堂は重要文化財に指定されているとの事です。とりわけ山門からお寺へ向かう参道は紅葉がすばらしく、赤や黄色のトンネルに秋の古寺の趣があふれていました。

バスの中では、市内の有志の方々（鳥飼ビデオクラブ）が製作された「鳥飼の足跡」を見ました。ビデオ製作の中心メンバーだった小林さんが今回のバスツアーに参加されており、初めに趣旨や目的など説明していただきました。ちょっと昔のことも記録に残さなければ風化してしまうものだと改めて思いました。これといった渋滞もなく、心地よい疲れの中、帰途につきました。

郷土史コーナー

三宅（みやけ）の歴史

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

応仁の乱と三宅氏

幕府の乱れと応仁の乱（4）

三宅国村・永清の兄弟は、戦国の複雑に推移する戦況の中で、主従関係を次々と変えながら生き延びていきました。天文 16 年（1547）２月 25 日に細川晴元方の香西元成が三宅城を包囲しました。この三宅城攻めに際して、石山本願寺証如は、３月８日・10 日・13 日、それに三宅城出城陥落後の 24 日、晴元および包囲中の各将へ、また、国村へも書状と品を贈っています。本願寺は戦乱のたびごとに勝敗の両者に慶弔の使者を出し、戦国の争乱に対する本願寺の中立の立場を標榜することが、むしろ通例でした。３月 15 日に出城が陥落しましたので、３月 22 日に国村は晴元勢に降伏しましたが、恭順の意を示し、在城を許されることとなりました。しかし、天文 18 年３月晦日に国村・永清らがいる三宅城を再び香西元成に攻撃され落城しました。落城の際、弟永清は自害しましたが、国村は城を脱出しました。三宅城は元成の拠るところとなり、５月には三好政長や晴元も入城して、晴元方の要衝となりました。やがて、６月 17 日に政長は三宅城を出て江口に布陣しました。三好長慶は三宅と江口の連絡を断ち、24 日に江口での激戦で、政長を敗死させました。そこで、身の危険を感じた晴元は三宅城を棄てて、近江の東坂本に逃れました。三宅城には再び国村らがもどったものと思われます。

天文 22 年９月３日に国村が、長慶の丹波攻めに参陣した際、三宅城は元成に攻められ、留守を守っていた三宅村良は戦死しました。永禄５年（1562）５月 20 日に国村は、畠山高政に加担するも、教興寺（八尾市）の一戦で、長慶に大敗しました。国村は堺に逃げ、以降歴史の記録には出てきませんでした。

なお、三宅落城については異伝があります。『三宅系図』（茨木市寺井五六氏文章）には、落城を３月 29 日とし、その際、国村・永清兄弟が切腹して果て、国村の後室も一男三女の４子を逃がしたのち自刃した、と記載されています。

『摂津市史』『摂津市史別巻』より　　担当　（茗荷）

摂津市の石碑（千里丘東1丁目）

茨木市の顕彰札（蔵垣内3丁目）

第21回 埋もれた摂津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成9年度　東正雀13－1試掘調査　その4

河川氾濫堆積について　このときの調査地は現在の山田川に近接するところでした。この河川の影響が類推される堆積が見られました。第４層の灰白色砂や第７層の明灰白砂です。土師器の一括遺物（小型丸底壷・甕・高坏）を含んでいた第６層はこの河川氾濫堆積の上層に位置します。第６層の上層の第５層も第４層の影響で砂質化したものと思われます。すなわち二時期の河川氾濫堆積にはさまれた形が想定されます。古墳時代の土器を含む第６層は、遺物を含まない古墳時代以前の砂層と鎌倉時代の土器を含む砂層にはさまれた、限られた期間に堆積したものでした。これは土器が置かれる以前はこの場所は川中か川辺であった可能性を示します。このような水辺の地に土器を人為的に置く行為を水辺の祭祀（さいし）と呼び様々な角度から研究が行われています。

①整地層	現　代
②旧耕作土	近　代
③黄褐色粘質土	磁器・近世
④灰白色砂	瓦器・中世
⑤暗茶褐色砂質土	
⑥暗茶褐色粘質土	土師器・古墳
⑦明灰色砂	

柱状概念図

□ 部分が河川氾濫堆積

水辺の祭祀について　祭祀とは神や霊あるいは祖先を祀ることで、広義には宗教的な儀礼一般をいいます。大場磐雄はこのような祭祀が行われる遺跡を（１）自然物を対象とするもの、（２）古社の境内ならびに関係地、（３）住居跡付属地、（４）古墳付属地、（５）単独遺物発見地と分類しています。水辺の空間を利用して行う祭祀については、亀井正道による川岸および川中に位置する祭祀遺跡の諸例についての研究（「河神信仰の考古学的考察・1938」）があります。その中で洪水多発地域に祭祀遺跡が多く存在するという立地上の共通点が指摘されています。しかし、具体的な祭祀の方法や変化については、充分に考察されておらず、まだまだ分らない所が多々あります。それはこの種の遺跡が立地の性格上、偶然的に発見されることが多く発掘調査による所見が少ないという現状が挙げられます。祭祀行為は、多分に人為的所作に富むもので、当時の人々の精神生活を知る上で重要な役割を果たします。東正雀の地で、古墳時代の人々は、どのようにして、何を思い土器を並べたのでしょうか。次号につづく。　担当　（伊部）